

#### ルツ記 4

さて、朝早くルツを送り出したボアズはナオミの言葉通り、すぐに行動を起こします。門のところの上っていきそこに座ると、例の買い戻しの権利のある人が通りかかります。「どうぞこちらに来て、お座りください」と彼を招いたボアズは、続けて町の長老10人を招いて一緒に座ります。当時長老は町において重要な存在で、裁判官のような役割を果たしました。複数の長老たちが認証したことは疑う余地のない合法性を持つものとなりました。10人もの長老を招き、長老たちが次々とその座に座ったことは、ボアズがこの町で築いていた社会的地位を示すと同時に、彼がこの件をどれほど丁寧に扱い、この町での正式な認証を得ようとしているかが伺えます。

ボアズは口を開き、ナオミがエリメレクの畑を売ることになっていること、それを買い戻す権利はあなたにあること、もし彼がそうしないなら自分が買い戻すことを告げます。最初は買い戻しに積極的であったその人は、ボアズから死んだ人の名を相続地に存続させるために、モアブの女ルツをも引き受けなければならぬ、と聞いてしり込みし、買い戻しの権利を辞退し、ボアズに買い戻しを委ねます。

ここでもう一度ナオミの置かれていた状況について少し捕捉します。実際のところ、その詳しい状況ははっきりせず、諸説ありますが、おそらくナオミたちがモアブの地に行く前、エリメレクがベツレヘムで所有していた土地は3節で畑、と言われており、共同の所有権のある畑の一部であったので、貧困を余儀なくされていたナオミですが、その畑を売って現金に換えることは難しかったのだと思われます。土地は通常親族の一員に売りに出されてから、それ以外の

人に売りに出されました。(エレミヤ32：6～12) ナオミはまさにこのことをしようとしていたのです。最初に土地の購入のことが語られているのは興味深いことです。畑を買い戻すだけとしたら、その親類はその責任を果たすだろう、と恐れたボアズは、死んだ人の妻、モアブの女ルツをめとり、彼女を扶養し、彼女との間に子をもうけ、エリメレクの家系の名を残す、というもう一つの責任を提示しました。ボアズの交渉は実に考え抜かれたものでした。

イスラエルの認証の方法に基づき、買い戻しの権利のある親戚は自分の履物を脱いでボアズに渡します。それは、買い戻しの権利がその人からボアズに譲渡されたことを示す行為であり、それが町の10人の長老たちの前でなされたことにより、交渉は正式に合意に達したことになります。ボアズは長老たちとすべての民に言います。「あなたがたは、今日私がナオミの手からエリメレクのものすべて、キルヨンとマフロンのものすべてを買い取ったことの証人です。また、死んだ人の名を相続地に存続させるために、私は、マフロンの妻であったモアブの女ルツも買って、私の妻としました。死んだ人の名を、その身内の者たちの間から、またその町の門から絶えさせないためです。今日、あなたがたはその証人です。」ナオミとルツを好意的なまなざしで見っていたすべての民と長老たちはボアズの決断を喜び、このように答えます。「私たちは証人です。どうか、主が、あなたの家に嫁ぐ人を、イスラエルの家を建てたラケルとレアの二人のようにされますように。また、あなたがエフラテで力ある働きをし、ベツレヘムで名を打ち立てますように。どうか主がこの娘を通して、あなたに授ける子孫によって、タマルがユダに産んだペレツの家のように、あなたの家になりますように。」

ボアズはルツのことをモアブの女ルツ、と呼んでいます。ボアズはルツがモアブの地から来たモアブ人、異教の地から来た外国人であることをはっきりと認識し、表明しながら、その彼女を買い取り、妻とする宣言を、これ以上はないような公の方法でなしています。それにこたえる町の人々はしかし、もはやルツのことをモアブの女、とは呼ばず、あなたの家に嫁ぐ人、入る人、として受け入れ、イスラエル民族を生み出したヤコブの二人の妻のようになるように、と祝福します。そしてボアズがエフラテで力ある働きをし、ベツレヘムで名を立てるように、ルツを通してボアズに与えられる子孫を通してあなたの家が確立されますように、と豊かな祝福の言葉は続きます。

町の門での法的手続きは終わり、ボアズはルツを迎え入れ、ルツはボアズの妻となり、二人は肉体的にも結合し、主はルツを身ごもらせ、彼女は男の子を産みます。

ルツ記全体を通し、著者が神の行為を書いているのは2か所だけです。1：6

「主がご自分の民を顧みて、彼らにパンを下さった」そして4：13「主はルツを身ごもらせ」ナオミが経験した大きな苦しみ、パンがない、子供がいない、に答え、パンを与え、子供を恵んでくださったのは、実に全能の主ご自身であったことが分かります。

ここで興味深いことに、最終場面になってその中心に取り上げられているのはナオミであって、ルツではありません。町の女たちは子供の誕生を喜び、ナオミのところにやってきます。そしてナオミにお祝いの言葉を述べます。「主がほめたたえられますように。主は今日あなたに、買い戻しの権利のあるものを

絶えないようにされました。その子の名がイスラエルで打ち立てられますように。その子はあなたを元気づけ、老後のあなたを養うでしょう。あなたを愛するあなたの嫁、7人の息子にもまさる嫁が、その子を産んだのですから。」女たちの言葉は賛美で始まります。神が私たちに起こるすべてを治めておられ、神のみむねを成し遂げられる、と告白しています。1章で見た、苦しみの中であってナオミに与えられていた信仰と同じ告白です。ナオミは苦しみを神の御手から受け取りました。そして今、ナオミに祝福を与えてくださったのも神です。それを今はナオミではなく、ベツレヘムの女たちが告白しているのです。女たちの感謝の理由は、主が買い戻しの権利のある人をナオミに与えてくださったこと、そして今日の前にいる赤ちゃんを与えてくださったことです。女たちのまなざしはその赤ちゃんに注がれており、その子がイスラエルで知られ、有名になりますように、と長老たちが祈った祝福と同じ内容の祝福を祈ります。女たちは、その子がナオミにとってどんなに大きな意味を持つかを語ります。その成長はあなたの喜びとなり、元気のもととなることでしょう。そしてその子はナオミの老後の面倒を見てくれることでしょう。あなたを愛するあなたの嫁、7人の息子にもまさる嫁が、その子を産んだのですから。この表現は特別な響きがあります。男性優位の当時の社会において、7人の息子がいることが理想的な家族のように言われていた（1サムエル2:5）ことを考えると、ルツはナオミにとって7人の息子にまさる、とは最高の賛辞と言えるでしょう。

ナオミはその子を取り、胸に抱いて養い育てました。当時の習慣に従い、ボアズは乳母を雇って子供の面倒を見させることもできたでしょうに、ナオミはその子を自分の子のように抱いて育てたのでした。夫と息子を失い、深い悲しみと孤独の時を過ごしてきたナオミにとって、その赤ちゃんを胸に抱いて育てる

一日一日はなんと大きな慰めであり、喜びであったことでしょう。彼女の悲しみは、その赤ちゃんの成長によって、どんなに癒され、その心は元気づけられていったことでしょう。ボアズとルツが、大切な自分たちの赤ちゃんをナオミの腕に預けたことも興味深いことです。

ここでまた近所の女たちが登場します。女たちはその様子を見て「ナオミに男の子が生まれた」と言って、その子に「オベデ」という名前をつけます。ボアズでもルツでもナオミでもなく、近所の女たちがその子に名前をつけた、というのは不思議なことです。この物語の中で、女たち、近所のおばちゃん仲間がなんと大きな役割を果たしていることでしょうか。ナオミが帰ってきた時、町の女たちが「まあ、ナオミではありませんか」と興奮してやってきたことを私たちは1章の終わりに見ました。それから、この何もかもなくしたナオミとモアブの嫁、ルツの生活は、女たちのコミュニティに深くかかわっていったのではないかと思います。ボアズ、という買い戻してくださる親戚が与えられ、ルツをお嫁さんにしたとき、女たちは共に喜びました。そしてすぐ神様がルツを身ごもらせ、男の子が生まれたとき、いち早くナオミのもとに駆け付け、賛美と祝いの言葉を述べたのは女たちでした。ナオミの苦しみ、打ちひしがれた姿を知っている女たちは、その赤ちゃんを抱いているナオミの姿に感動し、涙を流して喜び、ナオミと一緒にあって赤ちゃんの世話を焼いてくれたに違いありません。そんな女たちの親切に押し切られたのか、ナオミを取り巻くおばちゃん仲間を心からありがたく思っていたのか、ボアズは彼女たちがその子につけた名前を受け入れます。「オベデ」とは「仕える人」という意味で、珍しい名前でした。そしてこのオベデはイスラエルの偉大な王の祖父となるのです。ルツ記の最後はその偉大な王、ダビデの系図で閉じられます。

さあ、ルツとナオミの物語を通して、私たちは何を学ぶことができるのでしょうか？

1章では、ナオミの苦しみが描かれています。飢饉、夫の死、二人の息子の死、3重苦にあえいだナオミは、自分の名前をナオミではなく、マラと呼んでください、と言っています。聖書の中でナオミに匹敵する苦しみを経験したのは珥だけだった、とマイリス先生は言っておられます。ナオミの受けた喪失感は計り知れません。しかし、ナオミはその苦しみを主の御手から受け取りました。そして亡くしたものをよく悼みました。

ナオミの苦しみには、どんな意味があったのでしょうか。ナオミの人生にはどのような使命があったのでしょうか？ナオミにはその答えがあったわけではないと思いますが、ナオミは胸に抱くオベデ君をあやしながら思ったかも知れません。あの苦しみ、あの喪失がなければ、この子はこの世に誕生していなかった。聖書が与えられている私たちは、しかしはっきりと知ることができます。ナオミを通して主は、モアブの女を救い主の系図に導き入れられました。10代経てもイスラエルの会衆に加えられない、という呪いを受けていた民の娘が、イスラエル王国を打ち立てたダビデ王の曾祖母になったのです。そして、さらに救い主、メシアの祖先とされたのです。勿論そんなことになろうとは、ナオミもルツもボアズも知る由はありませんでした。ナオミは死ぬまで、そんなに大きな使命が自分の苦しみに託されていたことを想像すらしなかったことでしょう。しかし、ナオミは、主が、生きている者にも死んだ者にも御恵みを惜しまない方であることを、その人生で豊かに深く体験し、味わい知ったことでした。

よう。マラ、と呼んだ自らの人生が、この主にあってナオミ、と贖われたことをナオミの人生は力強く証しています。

ボアズはエリメレクのものすべて、マフロンとキルヨンのものすべてを買い取り、そしてルツを買い取り、自らの妻としました。買い戻しを成し遂げてくれたボアズは、イエス様のひな型と言えます。ボアズを通して、ナオミは失ったすべてを再び回復されました。私たちは、ナオミが経験したことにも勝って、イエス様を通して完成された贖いを頂いているのです。罪の赦しを受け、神の裁きから救われ、神の子とされる特権を与えられ、神の民、神の家族の一員とされました。そして、キリストの弟子、しもべとされ、それぞれの生涯を通して、神を喜び、体験し、その素晴らしさを証するように召されています。マイリス先生はこのように教えてくださいました。「容子ちゃん、神の言葉は私たちの血と肉を通して初めて他の人に伝わる良き知らせ、福音となるのですよ。だからイエス様も血と肉を持たれた。」私たちの生活、人生を通して経験した神様の助けと恵み、それこそが他の人の心を動かす証となるのです。

私たちは残された人生、老後のことを考え、心配するものです。私が言うのも何ですが、年をとることは大変なことです。「老い」とは人生最後に神様から与えられる大きなテストだなあ、と思います。人生の集大成。責任ある立場や働きを次の人に渡し、また次々と大切なものを失っていく中、私たちは何に望みをおいて歩むのかが問われます。しかし、それこそ、若い時に精力的に大きな働きをするにも勝って、次の世代への大きな証、遺産となるのです。

私たちはまた、神の国を受け継ぐ約束が与えられています。地上で失うものすべてが贖われ、栄光ある将来が約束されています。ナオミ、ルツ、ボアズの人生を通して、神様はこんなにも美しい物語を紡いでいかれました。彼らは、はからずも、神の壮大な救いの物語において大切な役割を果たしたのです。驚くべきことに、神様は私たちの小さな生涯にもよきご計画を持っておられます。神の御国の中で、私たち一人一人は大切な使命を担っているのです。神様の御手から自分自身を、私の人生を受け取り、主の素晴らしさがこの身を通してあらわされますように、と共に祈らせていただきましょう。

私たちは今少し時間をとって、このリトリートの恵みを数え、教えられたことを書き留めたいと思います。時間の関係で、①の問いをテーブルグループで分かち合い、②③は帰られてから時間をとって振り返りの時をもっていただきたいと思います。神様がそれぞれの人生で主が具体的になしてくださった贖い、助け、慰めがあることと思います。それらを思い出し、数えて、書き留める時間を是非後日とってください。

#### ルツ記4

**私があなを買い戻します。ルツ3:13**

- ① リトリートで心に残ったこと、教えられたこと、受けためぐみは何であったか？
- ② 今までのメモをもう一度見返し、振り返って考えてみよう。  
主が私の人生に与えてくださっているものは何だろうか？主が私の人生においてなしておられることは何だろうか？
- ③ 買い戻してくださった主の恵みを味わおう。主は私の人生において、どのような恵みを与えてくださってきたか。私はその主の恵みにどのように応えたいだろうか？